
無限転生者狩野竜牙のネタ倉庫

黒焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限転生者狩野竜牙のネタ倉庫

【Nコード】

N0126Y

【作者名】

黒焔

【あらすじ】

自分、黒焔が思い描いた無限転生者竜牙のクロスネタを投下する場所。

プロログだけ書いてあとは放置しているのが多いので、投稿話数が1つのものはこちらにまとめることにします。

人気が高いのがあれば頑張つて連載するかもしれませんが、連載時には別で投稿して、こちらに投稿されていたものは消すことにします。

3人の戦乙女に愛された龍の平定者（真・恋姫無双）（前書き）

記憶を持ったまま様々な世界で転生を繰り返す男、狩野竜牙。今度転生したのは三国志の世界。戦乱の世の中で竜牙は二人の少女と出会う。だがその二人の少女は、本来の歴史の有名な武将だった。そして彼らはある予言を耳にする……。

第1話 始まりは新たな決意から

3人の戦乙女に愛された龍の平定者（真・恋姫無双）

「おっちゃん、ゴマ団子5つ」

「あいよ！」

時は後漢の時代、場所は洛陽。

一人の男が二人の少女を連れて歩いていた。

「ほれ」

男はその二人に一つずつゴマ団子を手渡す。

「ありがとっ」

受け取ったゴマ団子を小さく千切って食べる青髪のポニーテールの少女。

背に身の丈ほどの長弓を持つその少女。

姓は大史、名は慈、字は子義。

「ありがとうございます」

一方、受け取ったゴマ団子を小さく頬張る黒い長髪の少女。

姓は司馬、名は懿、字は仲達。

その名前から分かるとおり舞台は三国志……とは少し違う世界。
主な武将のほとんどが女性という世界である。

そしてこの世界にはもう一つ大きく違うところがある。

「ほっ」

「わっすごい！」

「主……確かにすごいですけど……3個一気に食べなくても」

天高くゴマ団子3つを放り投げ口で受け止めた男に二人の少女はそれぞれの反応。

「むぐむぐ……」
「まったく、主って呼び方どうにかならんかねえ。
赫映^{かくや}は」

「そうそう、お固いんだよ赫映は」
「敬愛すべき者に対して主とよぶのは当然だと思いますけど。
葵^{あおい}」

彼らが呼び合っている名前、真名。

本人が心を許したことの証として呼ぶことを許した名。
正史とは違うもう一つの大きな違いである。

「大体違う世界の——ん？」

赫映に何か言おうとした男が、言葉を止めて空を見る。
澄み渡る青空に三筋の光が見えた。

「主？」

いつの間にか空を見上げていたその男に少女達は声をかける。

「……始まるぞ」

男のその言葉に、少女達は寂しそうな顔を一瞬浮かべるが、決意を固める。

「その若いの」

その三人に声をかけたのは一人の老人。

「そなたには数多の運命が入り混じっておる。それはこの世界を――」

「幸にも不幸にもする……だろ？」

男が遮った言葉が合っているのを証明するかのように、老人は驚いて沈黙した。

なおも男は言葉を続ける。

「そういえば最近こんな話が出回ってたな」

天より舞い降りし三つの流星、乱世を収める資質を持つ御遣いをこの地に導く。

同時に龍の平定者この地に名を轟かし、御使いと共に乱世の未来を担うであろう。

「その龍の平定者……俺のことだろ？ 大陸一の占い師、管輅」

「ほっほっほっ、そこまで見抜いておるとはな。ならばもう一つ予

言してやろう」

老人、管輅はその男に対する未来を口にする。

三の御遣い、乱世を収めるべく天の知識を用いる。
されどその知識、その者を破滅へと導く。
全て終わりし時、
■ ■ ■

「望むところだ」

「！！ ほう」

男の言葉に驚きながらも感心する管輅。

「わかっていながらもその道を行くか」

「それが俺がこの世界に來た運命ならな」

そう言うと男は葵と赫映を連れて歩き出す。
管輅はその後姿を見ながら一言呟いた。

「——若人の行く道に幸あらんことを……」

「お前らもついて来なくてもいいんだぞ。どうせ俺は――」
「主」

赫映は男の言葉を遮る。

「私達を甘く見ないでください」

その瞳に決意を表して。

「そうそう」

葵もそれに続く。

そして二人とも片膝を地に付け、自分達の想いを口にする。

私達

その力を

主、竜牙に捧げ

その命尽きるまで

あなたに付き従うことを誓う

「我、大史子義。この弓を持つて」

「我、司馬仲達。その知略を持つて」

「……お前ら」

男、竜牙は込み上げるものを堪え、二人に背を向ける。

「馬鹿者が……」

その言葉に力はなく、皮肉ということがよくわかる。

「——いくぞ」

「「はいっ」「」

竜牙は歩み出す。

この乱世の行く末を確かめに。

長きに渡る転生の中、その知識と力を持つて。

葵と赫映、二人の心から信賴する者と共に……。

ゼロの運命に介入する黒竜騎士（ゼロの使い魔）（前書き）

記憶を持ったまま様々な世界で転生を繰り返す男、狩野竜牙。

今度の転生先は6000年続く魔法の世界、ハルケギニア。

その魔法学校にて彼は魔法をほとんど使えない者、半端者と呼ばれていた。

だがそれは偽装の姿。

そして2年になったとき、彼は動き出す……。

第1話 動き出す半端者

ゼロの運命に介入する黒竜騎士（ゼロの使い魔）

「メイジだか貴族だかしらねえけどよ。お前ら揃いも揃って威張りやがって」

一人の少年が動く甲冑を相手に戦っていた。

少年の名は平賀才人。

この世界、ハルケギニアに使い魔としてルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールに召喚された少年である。

サイトはこのトリステイン魔法学院のメイド、シエスタに昼食を貰ったお礼としてデザートを運ぶのを手伝っていたのだが、とある貴族が香水を落としたのを発見。

それを渡そうとしたところ、どういうわけか二股事件に発展。

そしてその貴族、ギーシュ・ド・グラモンは八つ当たりの如くサイトに向かって決闘を申し込む。

突然この世界に来たことや、ルイズからの仕打ちでいい加減腹が立っていたサイトはその決闘を受けた。

だがその決闘は貴族同士が行うことを前提とした魔法を使うもの。

『青銅』の二つ名を持つギーシュのゴーレム、ワルキューレになすすべもなく殴られるサイト。

ルイズが止めるがサイトはなおも立ち上がる。

「やるだけ無駄だと思うがね」

嘲るギーシュにサイトの性格である負けん気が発揮される。

「全然利いてねえよ。お前の銅像、弱すぎ」

その言葉でギーシュの顔から笑みが消え去った。

そして一体のワルキューレがサイトに向かって突撃しようとしたそのときだった。

ザンツ！！

どこから飛んできたのか、サイトとワルキューレの間に剣が突き刺さった。

「誰だ！？」

決闘の最中に邪魔をされたギーシュは当然犯人を捜す。
だが犯人はすぐに現れた。

「どうもバカ貴族が勘違いしているようなんでな。手を出させてもらっただけだ」

その男は周りと同じ貴族の格好をしていたが、見る者から見れば明らかに雰囲気違っていた。

「半端者のカノウじゃないか。この僕が何を勘違いしているとでも？」

『半端者』

それはサイトの主人であるルイズの二つ名、『ゼロ』の次に悪い蔑称とされている。

系統としては風のドットクラスに分類される彼。

しかし彼が使える魔法は風のエアカッターと水のヒーリング、そしてコモンマジックのライトのみ。

そのくせ平民のようなやり方で一から打ち、剣などの武器を作る変わり者。

「杖という武器を使っているお前が素手の平民に対して決闘と言っている事がおかしいって言うんだよ」

「……ふむ、一理あるな。ではどうすればいい？」

ギーシュはカノウの言葉に頷き、彼に方法を問う。

「なに、その平民に俺が投げた剣を渡せばいい。別にディテクトマジックで調べてもいいぞ」

ただ頑丈なだけのなまくらだからな、と言って突き刺さっていた剣を地から抜き、サイトの前へと立つ。

「さあどうする？ この剣を手に取りればあいつは容赦なく攻撃してくるだろうな。引くなら今が最後」

まあ……と前置きしてその手に持つ剣をサイトの目の前の地面に突き刺して言った。

「貴族に喧嘩売るような奴が引く訳ないよな？」

「——当然だ」

サイトはふらつきながらも目の前の剣を掴んだ。

「あんだ！ 人の使い魔になしてんのよ！？」

カノウが再び観客……という名の野次馬の中に入り込むと、サイトの主人であるルイズが詰め寄ってきた。
魔法を使う貴族に平民が敵うはずがない。
それは武器を取ったところで同じところ。
それが貴族の中での通例であり、ルイズもそれに漏れず怒るのは当然のことであった。

「まあ普通の平民だったら負けるだろうな。だがあいつ『ゼロ』が呼び出した使い魔だ」

「……あんたまでそうやって貶すつもり？」

ルイズ自身魔法では劣っているが、似たようなものであるカノウだけには言われたくないのだろう。

だがカノウはルイズの言葉に首を振った。

「いや、褒めているのさ」

その瞬間、金属が地面に落ちた音がした。
周りの貴族は啞然とした顔でその光景を見ていた。
ルイズがそれに気づいて音がしたほうを見ると、剣を振り抜いたサイトと胴体を真つ二つに斬られたゴーレムの姿があった。

勝負はあっという間についた。

サイトが、先ほどまでとは打って変わった動きと力によってワルキユーレを破壊。

ギーシュに剣をつきつけて負けを認めさせた。

だが突然、サイトはその場に倒れた。

「サイト!？」

「気にすんな。突然力を使った反動だ。休めば起きるさ」

サイトに駆け寄るルイズに、カノウはサイトが落とした剣を拾う。
そして必死に起こそうとするルイズを尻目に、なぜか素振りを始めていた。

「ちょっと手伝いなさいよ!!」

小さな体なので起こすのは困難なのだろう。

苦労しているルイズがカノウを怒鳴るのも無理はない。

「手伝ってやらんこともないが……あの馬鹿どもをどうにかできるんならな」

ルイズがカノウの視線の先を見ると、幾人かが杖を取り出して自分達を睨んでいた。

あきらかに穏やかな雰囲気ではない。

「大方決闘で平民が勝ったことに納得していない連中だろうよ」

「何よそれ!？」

筋違いも甚だしい話である。

「で？ お前はこいつを守りながらあいつらを相手にできるとでも？」

「う……だからってあんたは勝てるって言うの?」

正直な話、まともに魔法を成功させることができないルイズでは難しいだろう。

だが目の前の人物もそれは似たようなもの。そう思っていたルイズだったが……。

「俺があゝの馬鹿どもに負けるとでも?」

カノウのその言葉は驕りとは取れなかった。

正確に判断し、自分はいくらに負けることはないと確信しているようなものが感じられた。

「……わかったわよ」

どちらにせよ自分にできることはない。

そう感じたルイズは、サイトを連れてこの場から離れることに専念することにした。

「グラモン。ヴァリエールを手伝ってやってこの場から離れる。戦えるだけの力は残ってないだろ？」

「しかし……いや、わかったよ」

自分が起こしたことで発生した事態だ。

ギーシュはカノウ一人に任せるのはよしとしかかったが、カノウの言ったとおりサイトとの決闘で力は消耗している。

そのため素直に従い、その場を離れた。

「……さて」

離れたのを確認するとカノウは未だ睨み続ける者達に向かって問いかける。

「で？ お前らは何が気に入らない？」

想定はしている。

だが……。

「お前が武器を渡さなければグラモンが勝っていたんだ！」

「平民ごときに力を貸すなんて貴族の恥だ！」

そのあまりにもバカバカしい発言に、カノウが呆れるにもかかわらず捲くし立てる馬鹿ども。

「大体お前らが言う平民のおかげで贅沢な暮らしをしてるんだろ
うが」

そう正論を言うカノウではあったが。

「平民が貴族のために働くのは当然だ！」

「平民は我々の家畜なんだからな！」

さらにエスカレートする始末。

それも世界が違えば袋叩き間違いなしの発言までしている。

「……で、俺にどうしろと？」

馬鹿どもに付き合ってもらえるかと思い、さっさと終わらせたいカノウは要求を聞くことにする。

「その剣を俺達に渡せ」

「……は？ 別にいいが」

別に未練も何もあったものではないので、要求通りに剣を渡す。
馬鹿はそれを受け取ると嫌な笑みをカノウに向けた。

「くらえ！！」

そして突然、剣をカノウに向けて振り下ろした。

「はぁ…… ホント貴族の風上にも置けない奴だなお前ら」

その振り下ろされた剣がカノウを貫くことはなかった。

「なっ!？」

馬鹿が驚くのも無理はない。

カノウは左手の親指と人差し指、そのたった2本の指で白刃取りをしていたのだった。

「身体能力でも上がる魔法の剣とでも思ったか？ 言ったよな、ただのなまくらだって」

馬鹿さ加減に呆れてため息をつくカノウ。

だがゆっくりと、確実にカノウを中心に周囲の空気が変わっていく。

「にしても本人達が納得している決闘の結果に口出しするわ、平民を平気で罵倒するわ……」

馬鹿どもがカノウに睨まれて震えだす。

周囲の者は何事かと思ったが自分達も寒気を感じ、口出しすることはできなかった。

「拳句の果てには許す替わりに剣を欲してその剣で奇襲するとか…

……」

彼らが受けていたのはカノウが発する殺気。幾度もの死線を潜り抜けてきたもののみが持つことのできるもの。戦争にも出ず、ましてや闘いもなくにしたことのない連中が耐えられるはずもない。

「——いつぺん死んでみるか？」

カノウがそう言った瞬間、最大級の殺気が彼らを襲い、意識を手放した。

「……」

失神した馬鹿どもを放置し、カノウは自分の部屋に向かって歩き出す。

リュウガ・クロー・ド・カノウ。

彼の前世の名は狩野竜牙。

無限転生の宿命を持ち、この世界とは違う魔術を使う者。

「……始めるか」

異端であるがために隠してきたが、物語が始まったことを感じ、その力を使うことを決意する。

主人公は魔法の使えない貴族、ルイズと異世界から現れた少年、サイト。

「さて、今回はどんな一生になるのやら……」

魔法が存在する世界、ハルケギニア。

狩野竜牙は本格的に介入を開始するのだった。

命の灯火と無灯の黒竜騎士（灼眼のシャナ）（前書き）

記憶を持ったまま様々な世界で転生を繰り返す男、狩野竜牙。

今度の転生先は地球の日本。

一見平和そうに見える世界だったが、その裏では紅世という異世界と繋がり、争いが起こる世界だった……。

第1話 動き出す転生者

命の灯火と無灯の黒竜騎士（灼眼のシャナ）

「はぁ……またこんなに食い散らかしやがって……」

——何、あの人？ 私と同じ学校の人みたいだけど

「ちっ……うちの学校の生徒までか」

——今、私を見た？

「ここまでトーチを増やしやがって……どこの紅世の徒だよ。めんどくせえ」

——トーチ？ 紅世の徒？ 何のこと？

「ねえ」

「ん？」

——どうしてか聞かなきゃいけない気がした

「さっきから色々と独り言言っていたけど、トーチって何のこと？」

——そしてこのとき、この人に話しかけたのが

「……珍しいな。ここまで自我が残っているトーチというのは」

——私の世界が変わった瞬間だった

一つの教室が荒れていた。

机は散乱し、無数の戦いの傷跡が残る。

そんな中、対峙する紅世の王フリアグネとシャナと名付けられたフレイムヘイズ、炎髪灼眼の打ち手。

そしてそれを見る宝具を宿したトーチ、ミステスの少年坂井悠二。

「天上の業火よ。契約者がこんなに貧弱では紅世の魔人の力も宝の持ち腐れ」

フリアグネの言葉を挑発と取ったシャナは自身の持つ大太刀、贄殿遮那を持ち直す。

「持ち腐れかどうか——」

確かめてみる？と続くはずだった言葉はそこで途切れる。

普通の人間ならば動けないはずの封絶の中で、この場にいる以外の者が動く気配がする。

そしてその気配は今いる教室のすぐ外……。

「まったく……こっちは静かに過ごしたいのに、厄介事のほうが俺に向かってきやがる」

入ってきたのはこの学校の制服を着る青年。

普段はともかく封絶の中ではかなり異質な存在。

「君は何者かね？ミステスではあるまいしフレイムヘイズか？」

存在の力が消耗しているわけではないその青年に問いかけるフリアグネ。

だが……。

「今まで出会ったフレイムヘイズにも紅世の徒にも言ったが、俺はトーチでもミステスでも……ましてやフレイムヘイズでもない」

その言葉に反応するのが一つ。

「まさか……お主、『無灯』か？」

「アラストール知ってるの？」

シヤナが首飾りの黒い石、愚世の王アラストールに問いかける。

「ああ、その者が戦いの場に現れるとそれ以上火が灯らないことからその名が付いたと聞く。噂では紅世の徒でもなくフレイムヘイズでもないと聞いていたが本当だったのか……」

「あゝ……そんなこと言っていた奴もいたな。その名はあまり好きじゃないんだが」

青年は頭を掻きながらそんなことを口にする。
そして懐からある石を取り出した。

「今まで色んな異名を言われてきたがな。黒竜騎士とか、ハンターとか……」

無数に出てくる異名の数々。

「まあ一番古い名を使うとするか」

そう前置きをしてその青年は構える。

先ほど持っていた石の変わりに、いつの間にか持っていた白銀と血のように赤黒い二刀を手に。

「月の墮天使。それがこの世界とは別の世界を生きた記憶のある俺、狩野竜牙だ」

幻想郷に招かれし黒竜騎士の転生者（東方）（前書き）

記憶を持ったまま様々な世界で転生を繰り返す男、狩野竜牙。
今度こそ平穏な世界ではあった。

だがその裏で確実に存在する幻想の存在がいた。

ある日、竜牙はその幻想の存在から誘いを受ける。

現代から忘れ去られた幻想の存在が生きる場所、幻想郷へと……。

第1話 出会う妖怪の賢者と転生者

幻想郷に招かれし黒竜騎士の転生者（東方）

「何度も繰り返すって言うのも楽だが面倒だな……」

住宅地で愚痴るのは黒いバンダナを頭に巻いた一人の男。

その男は普通に高校に行き、普通に授業を受け、普通に家へと帰る。少し違うのは彼には家族がいないことと、何故か学校一の美少女に好意を持たれているという事だけだった。

その年代には珍しく、彼は恋愛ごとに興味がなく、帰り際に声をかけられたもののそのまま帰路へと着いていた。

「よつと」

突然の跳躍。

傍目からは気まぐれに跳んだ様にしか見えない。

だがちょうど彼が足を踏み入れるはずだったその場所に、一瞬だけ確かに何かの穴が開いていた。

「何者なのよ。あの人間……」

どこかの空間である存在がそんなことを呟いた。

無事家へと着いた男は夕食の準備をし始めた。
ご飯を炊き出し、おかずを作り出す。

その手際から長年の経験が伺えるが、その量がいささか疑問に思えた。

明らかに一人で食べるには多すぎる量。さらには食器まで二組準備してある。

「よし」

彼はそんな不思議な食卓に腰を下ろす。するといきなりこんなことを言った。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

彼以外誰もいないはずの家にその言葉。

普通ならば異常に見えるがこのときは違った。

「……よく私がいることがわかったわね」

突然食卓を挟んで対面に空間の裂け目が現れ、中から一人の女が現れた。

彼女は彼を興味深そうに、しかし警戒しながら見つめる。

「気配、魔力、その他もろもろが読めれば難しいことじゃない」

彼のその言葉の、特に魔力と発したことで彼女の警戒は増す。

彼女の知識では、この世界ではすでに魔力なるものは既に御伽噺の中でしかないのだ。

それにもかかわらずこの男は軽々とそれを読めると言ってみせた。

「あなた一体……」

「まあそういうのは食べながらもいいじゃないか。どうせ毒が入

っていないことは確認済みだろ？」

出鼻を挫かれて少し不機嫌な彼女。

しかし目の前の料理を前にして無碍にするわけにもいかない。

「……いただくわ」

とりあえず料理を食すことから始めるのだった。

「あら、意外とおいしいわね。うちには負けるけど」

「所詮男の料理だ。早い、簡単が一番なんだよ」

結局そのまま食事が終わり、再度二人は対面。

「さて、まずは名乗らせてもらおうか。俺は狩野竜牙、一応人間でこの家の家主だ」

「こちらにも名乗らざるを得ないわね。妖怪にして忘れ去られた存在の楽園、幻想郷の守護者八雲紫よ」

「それじゃ俺からの質問。俺を狙ったのは何故か？　そして幻想郷とは何か？　この二つだ」

「いいわ答えましょう。まずは一つ目の質問にも関わるから幻想郷のことを先に話すわ」

そう言つて紫は説明を始める。

幻想郷——それは山奥の辺境の地に存在する妖怪などの人外が住まう土地。

現在は結界が張られており、こちらの世界——幻想郷で言う『外の世界』とは完全に隔離されたもう一つの世界。

また、その幻想郷で力のある者は何らかの能力を持っているらしい。外の世界でもたまにその能力を持つ者が現れることがあるのだが、竜牙もそのうちの一人だという。

そして感じられるだけでもその能力が強力すぎて外の世界、幻想郷問わずに影響を与えてしまう可能性があるということ。

「そういうわけであなたには幻想郷に来てもらいたい。不意打ちをした身分でこんなことを言うのも「いいぞ」……えっ？」

あまりにも早い了承の言葉に咂然とする紫。

彼女を知る者からすればかなり貴重な表情。

それだけ竜牙の反応は紫にとって予想外だった。

そして紫はさらに驚愕することになる。

「まあ力つていうのは自覚しているし」

「……なんですって？」

紫自身、竜牙に対しては慎重に観察していた。

だが長くはない期間ではあるものの、観察している間は一度も能力を使った様子はなかった。

つまりはとうの昔に力について知っていて使わなかったということ。

「お前から言うところの力は名称はあるのか？」

「ええ、私の力は『境界を操る程度の能力』。様々な物事の境界が操ることができる能力よ」

そう聞くと竜牙は少し考える。

「そうだな……その言い方で言う俺の力は最低でも3つあるな」

「3つって……それだけでかなり反則じゃないの」

「そうなのか？」

竜牙自身は疑問気に首を傾げるが、幻想郷では基本的に一人につき力は一つ。

それにもかかわらず簡単に3つと言ったのだ。

「まあいい。まず一つ目の能力、『武器を扱う程度の能力』。どんな武器でも触れただけで普通に扱えるというものだ」

例えば平安時代の人間がこの能力を持っていたとする。

平安時代の人間がマシンガンを持ったところで、普通は扱えないだろう。

意味不明なガラクタと見るのが関の山である。

だがこの能力を持つ人間だと、触れただけで未知の代物であるはずのマシンガンが、武器というだけで扱えるようになる。

「それって数千年後でも武器であれば扱えるっていうこと？」

「ああ、だがこの能力にはデメリットがある」

この能力はあくまで『扱える』だけである。
扱うだけならば一人前の技術があるものの、そこに経験は含まれない。

さらに一番のデメリットは扱っていくことによって経験は積まれても、それに伴って向上するはずの技術が向上することがない。
そのためにどうやっても、その武器を極めた達人には勝つことができないことになる。

「次に二つ目の能力、『魔術を扱う程度の能力』。闇と光限定だがな」

そう言つて竜牙は右手に光の玉を、左手に闇の穴を生み出す。
この能力はある程度応用力が利き、光で連想できるもの、闇で連想できるものそれぞれを術式で新たに魔術として編み出すことができる。

「あら？ 魔法じゃないのかしら」

紫の疑問は彼女からすれば尤もなこと。

幻想郷には魔法使いという種族があるほどで魔法には馴染みがあるものの、魔術というのは聞いたことがなかった。

「その辺は三つ目の能力に関わってくる。三つ目の能力、それは『記憶を持ちながら異世界へと転生する程度の能力』だ」
「——なんですって」

紫自身は知っている。

幻想郷でそれに近い能力を持つ者を。
一度見たものを忘れない程度の能力の保持者、稗田家の9代目当主

稗田阿求。

転生するときに大部分の記憶を失うものの、前世の記憶は確かに持っている。

だが竜牙の能力は違う。

転生されるときに失うはずの記憶を失わず、さらにはその記憶の中に異世界の文明の知識まで混ざっていることになる。

「それでかしら。魔法ではなく魔術と称したのは」

「理解が早くて助かる。魔法や魔術の定義は世界によって様々だから、魔術というのも俺が生まれた世界の定義だからな」

竜牙が生きた世界は様々で無数にあり、とある世界では魔法は奇跡を起こすものとされていて、また別の世界では魔力をプログラムに通して発動させるものというものもある。

世界ごとにその定義が違うため、魔法の定義が竜牙の言う魔術の定義と同一である可能性もあるということである。

「俺からの説明は以上だ。何か質問はあるか？」

竜牙がそう聞くと紫は少し考える。

「そうね……。私の能力ならあなたの生まれた世界にもいけると思うのだけれど帰る気はあるかしら」

「いや、別にいい」

紫の提案に対して即答で否定する竜牙。

紫は少し意外だったようであらと小さく呟いた。

「何故か聞いてもいいかしら」

「ああ。まず第一に俺の生まれた世界はこの世界とはまったく違う。

それこそ歴史どころか世界の創世自体からな。さすがにそれは難しいだろ」

「……まあやったことがないからなんとも言えないのだけれど」

やろつとすれば時すら越えることができる紫も、さすがに異世界にまで自身の能力を使ったことはなかった。

「それに生まれた世界にはそれほど未練はない。所詮害を成す者だったし、別の世界に転移しながらも一応天寿は全う出来た。これ以上望むものはないさ」

「そう……わかったわ」

紫も竜牙の言葉に偽りが感じられなかったため、それで了承する。

「それでいつ幻想郷にいくんだ？ 俺としては3日後くらいがいいんだが」

「あら、どうしてかしら？」

「いきなり消えたら捜索隊が出たりして面倒だろ。手続きはこつちがやつとくから」

可能性が少ないとしても、外の世界の人間が幻想郷に気付くことがないようにとの処置である。

「……そうね、わかったわ。じゃあ3日後の今の時間に迎えに来るから」

「おう、頼むぞ」

竜牙と紫の対談が終わり、紫は空間の裂け目に入って姿を消した。

「さて、準備を始めるかな」

竜牙は部屋に飾ってあった二本の刀を抜き放つ。

一方は光り輝く白銀の刀身、もう一方は濁った血のような赤黒い刀身の刀。

「……また使う機会があるかもな。爆癒、血呪」

竜牙の手の中にある二刀はその問いに答えるように部屋の光を反射するのだった。

運命を終えし竜騎士 外道の創造神により転生す（ランスシリーズ）（前書き）

呪われた運命を背負った竜騎士、狩野竜牙は呪いによる暴走の果てにその生を閉じる。その結果は竜牙の望むもので、彼は静かにそれを受け入れていた。だがその魂はある創造神に目をつけられ、異世界にて再び生きること強制されることになる……。

ベースは鬼畜王ランスですが、ランス5Dと戦国ランスも絡めていこうと思います。

第1話 外道創造神との対面

運命を終えし竜騎士 外道の創造神により転生す（ランスシリーズ）

かつて、闇雲に力を求めた男がいた。

彼はある力を宿す一族にありながら、何の力も宿すことなく生まれた。

一族の長でもある両親はそれでも愛してくれてはいたが、彼は両親の立場も考えて一人で旅をすることにする。

試行錯誤の毎日であるとき、彼はその後の人生で生涯を共にする幻想の存在と出会う。

その存在が持っていたのは呪われながらも強力な力。

彼はその呪いを知りながらもその存在と契約を果たし、その力を受け入れた。

その結果、彼は力を手に入れたがその力は男の想像以上の物。

だがそれ以上にその代償が高かった。

強力な力の代償は永遠と続く破壊衝動。

常に蝕まれる精神を絶え続け、彼は暴走したときのためにある行動を起こした。

それは彼を止めるために強き仲間を作ること。

その目論見はうまくいった。

強い力を手に入れた彼の元には、自然と人が寄ってきていた。

強き者は共にあり、弱き者には指導して強くする。

そんな日々を送っていた彼はある日、遂に暴走してしまう。

だがその暴走は彼の思惑通り、数多くの仲間達により鎮圧された。

彼の死によって……。

だが彼はそれでもよかった。
無理に力を求めた代償であることを自覚し、自身も仲間を救うために暴走に抗った。
故に彼には何の未練もなかった。

だが……。

「何だココは……？」

死んだはずの彼が目覚めたのは一面真っ白な世界。
自身の姿すら確認できず、ただ水の中を漂っているような感覚。
確かに死んだはずなのに、意識だけでも自身がまだ存在していることに困惑していた。

——クスクス

嘲る様な笑いが聞こえたのはそんな時。

「…………誰だ？」

彼はその笑いをあげた存在に意識を向ける。

視覚がはつきりしていないのかその姿を見ることは叶わなかったが、その存在は彼の問いに答えた。

——ぼく？ 君達で言うところの創造神っていうのかな

「…………その創造神が俺に何のようだ？」

神というものにあまりいい思いがない彼は、不機嫌になりながらもその意図を聞く。

——へえ。どうして意識があるのかは聞かないんだね

そんなこと彼には百も承知だ。

確かに自分は死んだ。

それにもかかわらず意識ははつきりとしており、対峙しているのは創造神と名乗るもの。

それを組み合わせれば何らかの事情で魂を呼び出したに違いない。

——まあいいや。君には争いを起こしてもらいたいんだよ

「争いだと？」

創造神が何故と思う彼だったが、その創造神自体が異常だった。

——あのちっちゃいのが平和のために戦うって言うのが面白いんだ

よ。戦争になればたくさん死ぬし

(コイツ……)

創造神と名乗りながら命が死ぬことを娯楽としている。
その異常性に彼は嫌悪する。

——だからね。君のその力でさらに争いを広げてほしいんだよ

「……断つたら?」

——そうだねえ。とりあえず君の魂は転生させないで消滅させて…
…あの世界も面白くなかったら消しちゃおうか

彼は別に輪廻転生しようとも思わない。

だが見ず知らずとはいえ一つの世界が消えるというのは許容できなかった。

「いいだろう。争いの引き金になればいいんだな?」

——うんうん。面白くなりそうだねえ

故に了承する。

だが彼はその言葉のとおりするつもりはなかった。

——あ、そうそう。君の力は制限させてもらうよ

「……面白くなるからか?」

彼自身その力の大きさは自覚している。

世界すら滅ぼしかけたその力を。

——あまり一方的過ぎてもつまらないからね。その代わり武器については君が使っていたものそのものを用意するよ

「そりゃありがとさん」

助かるが、相手が相手だけにそっけなく言う。

——それじゃ早速、君に争いを起こしてもらって世界に送るよ

言われた瞬間、彼の意識は少しずつ薄れていく。
その薄れていく意識の中、彼は一つ質問した。

「お前、名前は？」

——うん？ 言ってなかったね。ぼくの名前は……

ルドラサウムだよ

「どうでもいいけど……なんつー場所から始めさせてんだよ」

LP3年8月2週。

北の大国ヘルマンのボルゴ。

その牢獄の中が彼、狩野竜牙の新たな世界でのスタートとなるのだ
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0126y/>

無限転生者狩野竜牙のネタ倉庫

2011年11月4日08時17分発行